日本英文学会 中国四国支部 第 76 回大会
プログラム・梗概

会期：2024 年 11 月 2 日（土）、3 日（日）

会場：就実大学
〒703-8516 岡山県岡山市中区西川原 1-6-1

日本英文学会中国四国支部 事務局
〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東 6-13-1
安田女子大学文学部英語英米文学科田多良俊樹研究室内
TEL 080-3701-0547

第一日　11 月 2 日（土）（参加受付 12:30－）

開会式・総会（12:45-13:15　教養講義室棟 2 号館 2 階　504 教室）

（司会）就実大学教授　渡　辺　　浩

開会の辞　日本英文学会中国四国支部支部長　太　田　　聡

挨　　拶　就実大学人文科学部長　井　上　あえか

総　　会

研究発表（13:30-15:40）

第 1 発表　13:30-14:10　　第 2 発表　14:15-14:55　　第 3 発表　15:00-15:40

第 1 室（S 館 5 階　S512 講義室）

（司会）広島大学教授　今　林　　修

1. Geoffrey Chaucer の作品に見られる認識表現について
   広島大学大学院博士課程後期　木　村　典　政

2. 計量的分析からの Tennyson における immortality 省察
   比治山大学講師　藤　田　　郁

（司会）山口大学教授　太　田　　聡

3. （招待発表）英語の派生接尾辞*-ify*/*-ize* の付加に見られる基体の変化について
   高知県立大学教授　五百藏　高　浩

第 2 室（S 館 5 階　S513 講義室）

（司会）県立広島大学名誉教授　高　橋　　渡

1. 死に至る恥―*Rites of Passage* と恥の存在論―
   広島経済大学契約講師　井　上　　彩

（司会）広島工業大学准教授　楠　木　佳　子

2. ‘If She Had Lyv’d’: フルク・グレヴィルの作品におけるエリザベス朝時代への郷愁
   岡山理科大学講師　西　野　友一朗

（司会）ノートルダム清心女子大学教授　新　野　　緑

3. *The Pickwick Papers* における視線
   香川大学准教授　杉　田　貴　瑞

第3室（R館2階　R203講義室）

（司会）関西外国語大学教授　　中　井　誠　一

1. “Because you’re a dove”
—ヘンリー・ジェイムズの『鳩の翼』におけるシンボリズムとフェミニズム
広島大学大学院博士課程前期　　藤　田　敬　子

（司会）広島女学院大学准教授　　戸　田　　慧

2. 『日はまた昇る』におけるジェイクの語りとヘミングウェイのトラウマ
広島大学大学院博士課程前期　　秀　島　由里子

（司会）広島大学教授　　城　戸　光　世

3. 詩的霊源（アンブロージア）と主知的文学論の狭間で——阿部知二とエドガー・アラン・ポー
龍谷大学准教授　　池　末　陽　子

第4室（R館2階　R204講義室）

（司会）広島大学教授　　小　野　　章

1. 高校生の解釈力を高める英語授業の実践—英語詩を教材として—
広島大学大学院博士課程前期　　形　山　羽　奈

2. narrative がデジタルゲームを用いた言語学習に与える影響
広島大学大学院博士課程後期　　佐々木　陽　太

3. （招待発表）大学生の専門領域と英語学習の動機付け：
ナラティブアプローチによる分析と考察
岡山大学教授　　那　須　雅　子

特別講演（16:00-17:00）　S館1階　S101アカデミックホール）

（司会）広島大学教授　　大　地　真　介

演題　オールド・ギャツビー、オールド・スポート——『ギャツビー』100歳に寄せて
講師　京都大学教授　　森　　慎一郎

懇親会（18:00-20:00）

会場　大学生協カフェテリア（V館地下1階）
会費　5,000円
※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。

第二日　**11** 月 **3** 日（日）

シンポジアム（10:00-13:00　S 館 1 階　S101 アカデミックホール）

題目　英文学作品における Body Language 研究―中世から近現代にかけて―

（司会）安田女子大学教授　　髙　口　圭　轉

18 世紀から 20 世紀の英国小説の身体表現史の試み：eyes の場合

（講師）熊本学園大学教授　　堀　　正　広

中世から近代にかけての “wring one’s hands”

（講師）関西学院大学准教授　　渡　辺　拓　人

トピックモデリングを用いたシェイクスピアの戯曲における身体部位表現分析

（講師）熊本大学准教授　　冨　村　憲　貴

イギリス小説における身体表現としての「涙」の使用法―18 世紀から 19 世紀へ―

（講師）熊本大学非常勤講師　　池　田　裕　子

閉会式（13:00-　S 館 1 階　S101 アカデミックホール）

（司会）日本英文学会中国四国支部事務局長　　田多良　俊　樹

閉会の辞　　日本英文学会中国四国支部副支部長　　小　野　　章

第一日
― 研　究　発　表 ―

Geoffrey Chaucer の作品に見られる認識表現について

広島大学大学院博士課程後期　　木村（きむら）　典政（のりまさ）

本研究発表は、中期英語の作品に広く見られる、soothly や truly などの「確かに」「本当のことを言えば」など、命題に対する真偽性を表す認識表現について、Geoffrey Chaucer の作品に焦点をあて、その特徴について考察することを目的とする。代表的な先行研究としては、*The Canterbury Tales* や *Troilus and Criseyde* に見られる soothly や truly などの副詞に焦点を当てたものとして中尾(2011)、sooth to say などの独立不定詞に焦点を当てたものとして大野(2015, 2024)などが挙げられる。今回の発表では、これらの先行研究を踏まえ、soothly や truly などの副詞に関して、今まであまり強調されてこなかった脚韻との関わりを軸として、考察したい。一例として、soothly と truly を比較してみると、音節数に違いはあるものの、前者は全く脚韻位置に現れない一方で、後者は脚韻に多く、脚韻に用いられる場合には、faithfully などの類義語と韻を踏むなどの傾向が見られる。さらに、そうした truly を含む脚韻が、文脈の背景にある登場人物の心情と関連している例も多く観察された。そのため、今回の発表では、統語論的な観点（文中の位置や共起する命題内容の法など）および語用論的な観点（原典との関係や、語り手など）を考慮し、脚韻を中心に作品の中でどのような役割を果たしているか、ということについて述べたい。

計量的分析からの Tennyson における immortality 省察

比治山大学講師　　藤田（ふじた）　郁（いく）

19 世紀イギリス桂冠詩人，Alfred Tennyson（以下 Tennyson）の作品における immortality については，これまでにも度々議論がなされている。Immortality の概念は，不老不死を意味する存在論的不死性と，死後も名声や感情が残ることを示す認識論的不死性に大別される。Tennyson の作品に描かれているとされているのは，そのほとんどが後者の認識論的不死性であるとされている。研究者によってはこの認識論的不死性を spiritual immorality とし，存在論的不死性との違いを明示している。

Tennyson の複数作品に上記いずれかの immortality が描かれていることは指摘されているが，Tennyson の作品においては *immortal* や *immortality* といった，直接 immortality を表す語彙はほとんど使用されていない。したがって，読者や研究者が immortality を読み取る元となるのは，作品内に描かれている他の要素，語であるということができる。

本研究ではトピックモデルという計量的分析手法を用いて Tennyson の 593 作品で用いられている名詞を分析した結果を基に，Tennyson の作品内で描かれている immortality を考察する。トピックモデルの結果，これまでの研究が指摘するより広範な Tennyson の作品に認識論的不死性が描かれている可能性が示唆された。また本発表では，作品内でどのような語によ

って immortality が描かれているのか，またどのような作品に immortality が描かれているのか，そして Tennyson における認識論的不死性とはどのようなものであるかを論じる。

英語の派生接尾辞*-ify*/*-ize* の付加に見られる基体の変化について

高知県立大学教授　五百藏（いおろい）　高浩（たかひろ）

本研究は，英語の接辞付加において観察される基体の変化を考察する。特に動詞形成派生接尾辞*-ify* と*-ize* を考察の対象とする。これら２つの接尾辞は副次強勢を担うという点で共通した特性を有している。他方，主強勢の配置について異なる振る舞いを示す。*-ify* 派生語では主強勢は当該接尾辞の直前の音節に置かれ，*-ize* 派生語では，一般的に，当該接尾辞の左側に無強勢または副次強勢のある音節が現れる(Plag 1999: 197)。Plag(1999: 228)はこれらの接尾辞を付加することにより形成される語は音韻論的に条件づけられた異形態であると考えている。

本発表ではこれらの接尾辞を有する派生語にはいくつかのまとまった下位類が存在することを示す。*-ify* 型動詞では，基体部分が本来の主強勢位置を維持しながら末尾音節のライム部分を切除される類(例: vivify)と，基体部分の分節音は保持したまま主強勢位置が 1 音節後方に移動する類(例: solidify)が見られる。

(1)　vívid + ifȳ →　*vívidifȳ, *vivídifȳ, **vívifȳ**

(2)　sólid + ifȳ →　* sólidifȳ, **solídifȳ**, *sólifȳ

-ize に関しては，基体の音形は残しつつ主強勢の 1 音節後方への移動と副次強勢が消失がする類(例: diplomatize)，基体の末尾音節のライム部分が切除されるが主強勢の位置は変化しない類(例: Socratize)，基体の音形及び主強勢位置は維持しながら副次強勢のみ消失する類(例: aerosolize)が見られる。

(3)　díplomàt + ìze →　*díplomatìze, *díplomìze, **diplómatìze**

(4)　Sócratès + ìze →　*Sócratesìze, **Sócratìze** *Socrátesìze

(5)　áerosòl + ìze →　**áerosolìze**, *áerosìze, *aerósolìze

本発表では，このような分布を生じるしくみを制約の相互作用の観点から説明することを試みる。

死に至る恥
―*Rites of Passage* と恥の存在論―

広島経済大学契約講師　井上（いのうえ）　彩（あや）

「人間は恥ゆえに死に得る。」（“Men can die of shame.”）これは William Golding による長編小説、*Rites of Passage*（1980）の最終ページに書かれた一文である。本作品はオーストラリアへ向かう船の中という閉鎖的な空間を舞台としているが、そこで Golding は自らの見聞に基づき、恥が原因となり死を選ぶ人間を描こうとした。実際本編の後半では、コリーという牧師が大衆の面前で醜態を晒してしまい、その後襲いくる羞恥心に耐えられず、自死を選ぶ。しかし、登場人物の一人であるサマーズ大尉が言うように、真のキリスト教徒であれば「絶望」すること

はなく、ましてや神の救いの存在を否定する「自殺」という手段を選ぶことはないはずだ。それではなぜ、敬虔な英国国教会の牧師であるコリーは、そのような聖職者らしからぬ結末を迎えるに至ったのか。そもそもなぜ、コリー牧師は後に自分の死の原因になってしまうような恥ずべき行動を晒してしまったのか。本発表ではこれらの問いに対して、精神分析家 Jacques Lacan の「恥在論」（“hontologie”）を援用しながら、本作品で特に意識されている「見られる」行為と結びつけた考察を行う。

‘If She Had Lyv’d’:
フルク・グレヴィルの作品におけるエリザベス朝時代への郷愁

岡山理科大学講師　西野（にしの）　友一朗（ゆういちろう）

フルク・グレヴィル（Fulke Greville, 1554-1628）はエリザベス１世、ジェイムズ１世（６世）、チャールズ１世の時代に活躍したイングランドの宮廷人である。当時の宮廷人が君主の助言役となることを目指したように、グレヴィルはジェイムズ政権において財務大臣や枢密院顧問官として活躍した。グレヴィルは、*A Dedication to Sir Philip Sidney* [*The Life of the Renowned Sir Philip Sidney*] (1652）を通して政治的な意見を表明したが、エリザベス女王の政治を規範としたものが散見される。この背景には、グレヴィルは元々エリザベス女王の伝記の執筆を計画していたが、国王ジェイムズの側近ロバート・セシルから拒否され、その代わりにシドニーの伝記を執筆したという経緯があった。これまでのグレヴィル研究では、*Dedication* を国王ジェイムズに対する批判がエリザベス朝時代への郷愁を通して展開されている作品として解釈されることが多い。本研究ではグレヴィルの韻文作品である『シーリカ』（*Cœlica*, 1633）や『君主論』(*A Treatise of Monarchy*, 1670) にも射程を広げ、エリザベス朝時代への郷愁の中にエリザベス女王の政治手腕を国王ジェイムズにも求めるグレヴィルの姿を明らかにする。

The Pickwick Papers における視線

香川大学准教授　杉田（すぎた）　貴瑞（たかよし）

Charles Dickens の処女小説 *The Pickwick Papers*(1836-37)は、主人公の Mr. Pickwick がクラブのために見聞を広めるため旅に出て、その内容を報告するという形で始まる。いわば Mr. Pickwick による見聞録の体裁であるはずだが、当の Mr. Pickwick は「観察する」よりも「観察される」対象としてしばしば描かれる。とりわけ、彼が滑稽な姿を披露して笑いの的になるという場面は、本作品において繰り返し描かれるモチーフであり、その際には Mr. Pickwick が完全に周囲の（あるいは読者の）視線を浴びる対象となる。

そもそも Dickens の作品において、見る／見られるという視線の動きはしばしば重要な意味を持つ。たとえば、*Oliver Twist*(1837-39)において、Fagin は監視能力によって掏摸の少年たちを支配する。あるいは、*The Old Curiosity Shop*(1840-41)において、少女 Nell が金貸しの Quilp によって狙われるという構図も、見る／見られるという関係性において象徴的に描かれる。これら初期作品に描かれる視線の動きはいずれも、視線を向ける側が向けられる側に対して優位性を保つという権力の機能を発揮する。しかし、*The Pickwick Papers* においては、たしかに視線によ

って優位性が描かれるものの、直接社会問題の描出という深刻なテーマには結びつかず、牧歌的な作風は揺るがない。本発表では、この牧歌的な作風の土壌を探るために、作品において Mr. Pickwick に向けられる視線の動きに注目するとともに、目を向ける側の好奇心について考察を加えたい。

“Because you’re a dove”
――ヘンリー・ジェイムズの『鳩の翼』におけるシンボリズムとフェミニズム

広島大学大学院博士課程前期　藤田（ふじた）　敬子（けいこ）

本研究は『鳩の翼』(1902)をフェミニズムの視点で考察し、ヘンリー・ジェイムズがいかにシンボリズムに乗っ取った語りの技法を駆使して新しい価値観を創出しているかを論証するものである。本作品を、同じく国際関係を主要なテーマとし、アメリカ娘を主人公とする初期作品の『デイジー・ミラー』(1878)と『ある婦人の肖像』(1880–81)の二作品と比較することで、この見解をより明確にしたい。三作品には次のような共通点がある。経済的にも社会的にも自由で自立している女性である「新しい女」の概念を登場人物に反映させている点。各作品の主人公であるデイジー・ミラー、イザベル・アーチャー、ミリー・シールが、伝統や文化に憧れを抱きヨーロッパの地を訪れ、移動するという設定であること。始めは、19 世紀末の混乱する社会において彼女たちが受け入れられるかどうかに主眼が向けられるが、次第に、結婚相手として資産目当てに狙われる、あるいはそうであるかのように物語が展開し、最後には、イタリアの地で結末を迎えることになる、というプロット。まずは、これらの共通点に、どのような意味が込められているかを解明する。そして、象徴的描写、直喩や隠喩といった間接的手法を、他の二作品より多く巧みに使うことによって、『鳩の翼』では、アメリカ的な新しい価値観が結晶化し、フェミニズム主張が見事に表象されていることを示したい。

『日はまた昇る』におけるジェイクの語りとヘミングウェイのトラウマ

広島大学大学院博士課程前期　秀島（ひでしま）　由里子（ゆりこ）

ロストジェネレーションを代表する作家の一人であるアーネスト・ヘミングウェイは、代表作『日はまた昇る』（１９２６年）において、舞台をパリに設定し、多くの国籍離脱者である人物を登場させた。主人公兼語り手であるジェイク・バーンズは、仲間たちと虚無的かつ享楽的な生活を送る一方、戦争による性的不能に苦しんでいる。多くの研究者がジェイクの傷に注目し、それが精神的なものであるか肉体的なものであるか、またその意味について議論してきた。しかし、ヘミングウェイ自身の抱えていた戦争トラウマについては、これまで十分に考察されてこなかった。

トラウマ理論研究によれば、トラウマを語ることは困難である一方、原因となった出来事や現状を書くことによって心的外傷を癒そうとするメカニズムが存在することが明らかにされている。『日はまた昇る』はこの葛藤が現れた作品である。また、ジェイクは PTSD の症状の一つである回避行動や兵士が弱音を吐くことを許さなかった社会背景の影響からトラウマを語ろう

としないものの、男性性の重視される社会において自身の男性性を誇示するなど、トラウマを克服しようとする態度が見受けられる。

本発表では、ジェイクの語りに焦点を当て、彼の内面に秘められた傷を再検討するとともに、そのトラウマがいかにヘミングウェイ自身の戦争トラウマと関連しているかを示したい。

詩的霊源と主知的文学論の狭間で
――阿部知二とエドガー・アラン・ポー

龍谷大学准教授　池末（いけすえ）　陽子（ようこ）

作家であり翻訳家でもあった阿部知二が、エドガー・アラン・ポーに傾倒していたことはよく知られている。彼の卒業論文のタイトルは“Edgar Allan Poe as a Poet”（1926）であり、初期のエッセイにおいて「１人のポウのために世界はいかに深みと厚みを増したか」とも語っている。阿部の作風へのポーの影響は、「愛のない風景」（1928）等の初期作品に顕著であるのみならず、代表作「冬の宿」にも及んでいる。「アッシャー館の崩壊」や「ウィリアム・ウィルソン」、「黒猫」を彷彿とさせるゴシック性や作品構造は言うまでもなく、音の効果の借用、詩の引用、語りの手法、ポーと阿部自身の伝記的要素の交錯など、サブリミナルな効果が阿部の作品において随所に見られる。阿部知二研究会は残念ながら 2022 年をもって解散したが、30 年に渡る研究会史の中で幾度となくポーとの関連性についての議論が浮上している。本発表では、その比較研究の軌跡を整理するとともに、彼の卒業論文を中心に、作家阿部知二の原点ともいえるポーの影響についてあらためて論じてみたいと思う。

高校生の解釈力を高める英語授業の実践
－英語詩を教材として－

広島大学大学院博士課程前期　形山（かたやま）　羽奈（はな）

本発表では，日本人高校生に詩の解釈を指導した授業実践報告に基づき，英語詩の解釈の指導の教育的効果を追求する。

英語の授業で英語詩を用いた読解指導は，英語 4 技能の能力向上に加え，解釈力の育成に効果的であることが，先行研究の実践報告では示されている。文部科学省は英語の授業において高校生が「情報を整理しながら考えを形成し，英語で伝え合う」ことを求めているが，これは「解釈力」に相当するものである。

文学作品の一形態である英語詩は，比較的短いテクストから多様な解釈が許容されることが多い。生徒は英語詩の解釈に取り組むことで，テクストや自分自身，他者とやりとりを重ね，読みを深めつつ自分の解釈を構築する経験が得られる。英語詩を用いた解釈の指導は，高校生の解釈力を指導するのに効果的であると考えられる。

本発表では，英語詩の解釈の指導が高校生へどのような教育的効果をもたらすかについて授業実践をもとに検討し，英語の授業における英語詩の解釈の適切な指導法を考察する。

narrative がデジタルゲームを用いた言語学習に与える影響

広島大学大学院博士課程後期　佐々木（ささき）　陽太（ようた）

インターネット環境の普及などにより，デジタルゲームを用いた言語学習(DGLL)が大きな注目を集めている。その中で，娯楽用のゲーム(COTS games)を DGLL の教材として活用しようとする試みは大きな広がりを見せており，好きな方法で学ぶことが出来る自律学習への応用が期待されている。しかし，現在流通している COTS games は多様な内容やシステムを持ち，どんな要因を持った COTS games が自律学習に適しているかは意見が一致していない。本研究は，COTS games が持つ要因の一つとして，narrative に注目する。narrative が含まれる教材を用いた DGLL では，学習者が何らかの学びを得たという知覚(perceived learning; Caspi and Blau, 2011)をより感じやすくなる(Alexiou,2022)。Perceived learning をより多く知覚する学習者は，その後自律学習をより構築することが示唆されている(Wei et al，2023)。このため，narrative が自律学習を促進する要因の一つであり，narrative を含む COTS games がより自律学習に適していると考える。しかし，COTS games を教材とした場合においても同様の影響があるかはほとんど実証されておらず，自律学習に適した教材の条件として考慮すべきかどうかはほとんど未解明である。本研究は，narrative が自律学習に与える影響を明らかにし，それぞれの学習者が DGLL を実施する際にどのような COTS games を選べばよいのかについての有効な示唆をもたらすことを目指す。このため，学習者が narrative または non-narrative な COTS games を用いて，どのような DGLL を構築するかを調査する。本発表では予備調査の結果を示し，本調査に向けた改善点を含む今後の展望を述べる。

大学生の専門領域と英語学習の動機付け：
ナラティブアプローチによる分析と考察

岡山大学教授　那須（なす）　雅子（まさこ）

公共交通機関や観光地などでは英語化が進んできているが、それでも日常的な英語使用が十分とは言えない日本の言語環境では、日本人大学生の場合、入学と同時に受験という大きな目標を失い、明確な外発的動機づけがなく英語学習から遠ざかってしまいがちである。その結果、入学時に獲得していた英語力の維持すらおぼつかないという実情がある。受験期までに上昇した英語力が、大学 1・2 年生をピークにして徐々に下降する現象に対して有効な手だてが必要だと実感している大学教員は少なくない。さらに、大学生は高年次に進むにつれて専門分野の学びが中心となり、英語力を向上させるためには各自が目標設定をして自律的な学習を行うことが重要となる。

本発表では、このような日本人大学生を取り巻く状況の中でも、自らの専門領域に関わるキャリアパスの中で英語学習を意味づけることに成功している事例に焦点をあてて、長期的な自律学習を支える動機付けの形成過程やその変容について、インタビューを行って分析考察する。

また、専門領域における英語学習を成功させるうえでは、大学 1・2 年次の英語科目と高年次における英語教育との連動に課題がある。そこで、発表者の勤務校では専門科目と一般英語科

目を連携させた教育実践を円滑に機能させるため、部局と一般教育担当の英語教員との連携構築を目指す取り組みがスタートした。本発表では、このような新しい試みについても一部紹介したい。

第二日
— シンポジアム —

英文学作品における Body Language 研究—中世から近現代にかけて—

（司会）安田女子大学教授　髙口（こうぐち）　圭轉（けいすけ）

本シンポジウムのテーマは、二つある。一つ目のテーマは、Leo Spitzer (1948)の中で述べられている“the ultimate unity of linguistics and literary history”、つまり歴史的な視点から文学作品の表現の問題を扱うこと。このテーマは、その後桝井（1968）、Adamson (1998, 2000)、Auer, Anita et al. (2016)と受け継がれてきた。もう一つのテーマは、Korte (1997)によって論じられた文学作品における body language の問題である。その後 Poplawski (ed.) (2001), Hardy (2007), Mahlberg (2013)、そして Hori, Ikeda, & Koguchi (eds.) (2019)によってこのテーマは扱われてきた。

本シンポジウムでは、body language 研究の枠組み、有用性と可能性を具体的に示すともに、歴史文体論や英語表現史として位置づけられる英文学作品における body language 研究の意義について議論していきたい。

18 世紀から 20 世紀の英国小説の身体表現史の試み：eyes の場合

（講師）熊本学園大学教授　堀（ほり）　正広（まさひろ）

本発表は、二つのテーマを論じる。研究の枠組みとその試みとしての実践例である。

ひとつ目は、英文学作品における身体表現を通時的な視点から扱う際における、研究の枠組みである。身体表現と characterisation との関係を、Culpeper の *Language and Characterisation* (2001) と Culpeper and Fernandez-Quintanilla の “Fictional characterization” (2017) において提言されている top-down や bottom-up、そして Visual features などの認知文体論の考え方を参考にして理論的な枠組みを提示したい。そして、文学作品における身体表現史、さらにいえば歴史文体論と英語史とは、研究の目的や分析の手法においてどのような点に、類似点があり相違点があるかを論じる。

ふたつ目は、前述の理論的な枠組みを元に、Korte の *Body Language in Literature* (1997)を踏まえて、実践例として、「18 世紀から 20 世紀の英国小説の身体表現史」の試みとして、eyes の表現に焦点を置いて具体的に論じていく。18 世紀から 20 世紀において、eyes はどの作品にも見られるが、20 世紀に向けて頻度として増加傾向がある。また、「形容詞＋eyes」の表現は、時代

の変化と共に多様性が見られる。しかし、その頻度の増加や表現の多様性は、作家ごとに違いがあり、英語史で見られる連続性よりも飛躍や非連続性が見られる。

中世から近代にかけての“wring one’s hands”

（講師）関西学院大学准教授　渡辺（わたなべ）　拓人（たくと）

現代英語で悲しみや心配を表す身体表現“wring one’s hands”は、13 世紀初頭までさかのぼる古い表現である（MED: s.v. *wringen* 4）。発表者はこれまで、中英語におけるその用法に関して以下のような事柄を明らかにしてきた。チョーサー作品と一部のロマンス作品を対象にした調査では（渡辺 2023「中英語文学における“wring one's hands”についての一考察」）、悲嘆の場面が多く描かれる作品内でも 1-2 回の使用頻度にとどまり、他の身体表現とも共起しつつ、物語の中で特に重要な悲嘆の場面を描写するのに用いられる傾向が見られた。また、少数ながら出現する異形“wring one’s fingers”は、単なる“wring one’s hands”のヴァリエーションではないことも示した（渡辺 2024「中英語の身体表現“wring one’s fingers”について」）。具体的には、女性の描写に限定して用いられることに加え、女性の「美しい指」が揉み絞られ、傷つけられることで、悲嘆に見舞われる前後での落差を強調するという独自の特徴も認められた。

本発表では、中英語における用法をより包括的に探るともに、時代が近代へ移り変わってから、中英語で見られた特徴はどれほど継承されたのか、あるいは変容したのかといった点に着目したい。

トピックモデリングを用いたシェイクスピアの戯曲における身体部位表現分析

（講師）熊本大学准教授　冨村（とみむら）　憲貴（のりたか）

シェイクスピアの戯曲には、様々な身体部位を表す語が登場する。戯曲のテクストに品詞タグを付与した WordHoard（https://wordhoard.northwestern.edu/userman/index.html）を用いて集計すると、主要戯曲 37 編の総語数 810995 語中、名詞は 144435 語を占める。この中には、hand（1119 例）、eye（1035 例）、head（589 例）、tongue（470 例）、face（445 例）、ear（353 例）、arm（348 例）、mouth（165 例）、nose（77 例）といった身体部位に関係する名詞が含まれる。

発表者のこれまでの分析において、上記の名詞群で多数を占める hand に関して、次の 2 点が明らかになった。1 点目は、ロマンス劇 4 編で hand の直前に現れる形容詞によって hand に付与される性質が、可視的特徴、不可視的特徴の双方に渡っていることである。2 点目は、これらの描写の多くは、手のみならず人物そのものの性質を表しており、hand がメトニミー的な表現手段として利用されているということである。

このような特定のジャンルに焦点を当てた分析によって、シェイクスピアの作品における身体部位表現の特徴の一端を明らかにすることができるが、それとともに、シェイクスピアの戯曲群全体で身体部位表現がどのような位置を占めているのかも検討する必要がある。本発表では、その方法の 1 つとしてトピックモデリングを用い、抽出されるトピックと身体部位表現が用いられる文脈との関連を検討する。あわせて、戯曲の創作年代による通時的な分析を試みる。

イギリス小説における身体表現としての「涙」の使用法
—18 世紀から 19 世紀へ—

熊本大学非常勤講師　池田（いけだ）　裕子（ゆうこ）

涙 (‘tears’)は感情を外面に表す身体表現としてイギリス小説において頻出する。その使い方は時代という軸に、個々の作家の特徴や作品の主題等の要素が複雑に絡み合っているようである。今回の発表では、このような点を考慮しながら、18 世紀から 19 世紀のイギリス小説における涙の使用法に焦点を当てたい。

まず、時代により涙の頻度や質において顕著な特徴があるのか、という点について客観的に概観していく。具体的には、“tears”と結びつく形容詞や動詞の種類、“tears of”の表現などに注目し年代による傾向を分析する。

次に、18 世紀末の Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* と 19 世紀初期の Austen の主要作品を取り上げ、具体的に分析したい。18 世紀の感傷小説では、涙は、失神・頬のほてり・溜息と同様、特に女性の繊細な感情の高まりを表すものとして頻繁に使用された。しかし、*Udolpho* では涙は多用されるが、涙を「抑える」「隠す」という人物の主体的な介入を示す表現が目立つ。さらに、18 世紀の小説から大きな影響を受けた Austen の作品を考察すると、頻度は低いものの涙の使用は性格描写・主題・場面等と深く結びつき、非常に重要であることが浮かび上がってくる。時代の流れと共に、コンベンションとしての身体表現は、作家の個性的・創造的表現へと変容していくのではないだろうか。

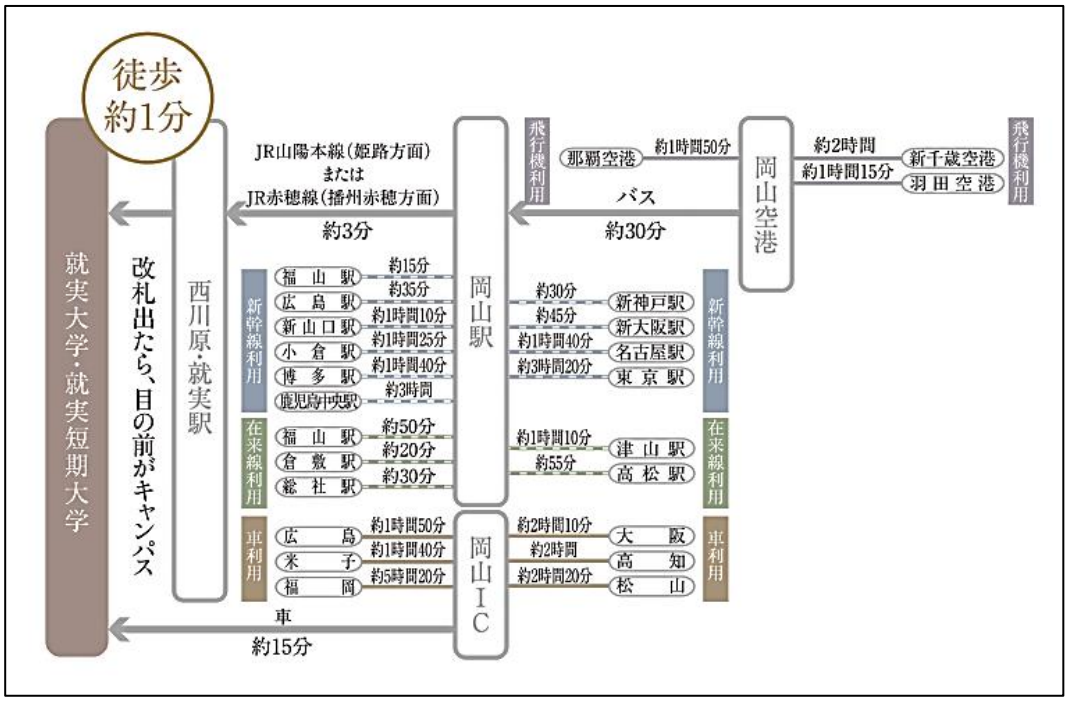
― 交通案内 ―

大学所在地

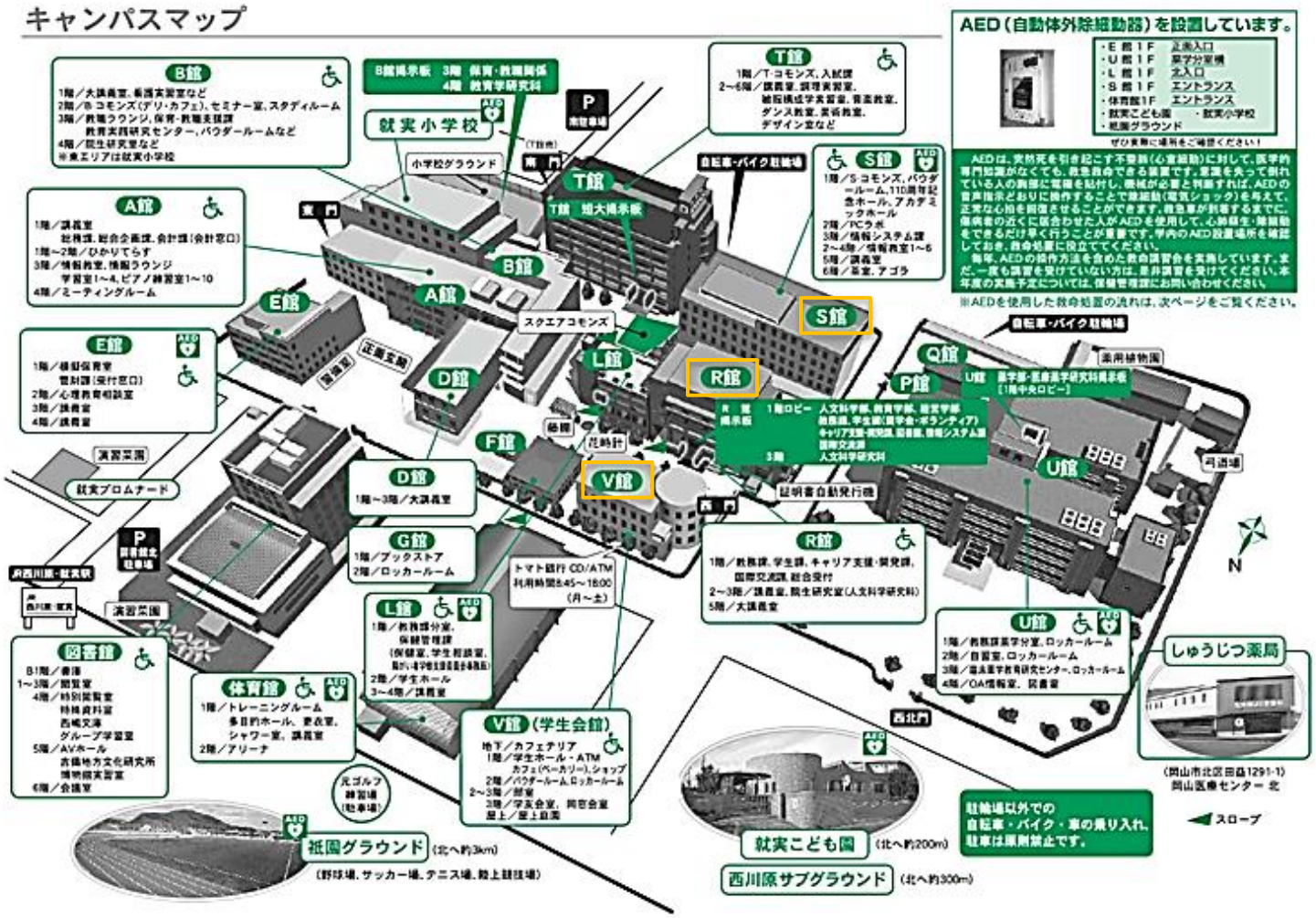
〒703-8516 岡山県岡山市中区西川原 1-6-1
TEL：086-271-8111

大学への主な交通機関

ＪＲ山陽本線・赤穂線「西川原駅」下車徒歩１分
（「西川原駅」は通称「西川原・就実駅」です。）

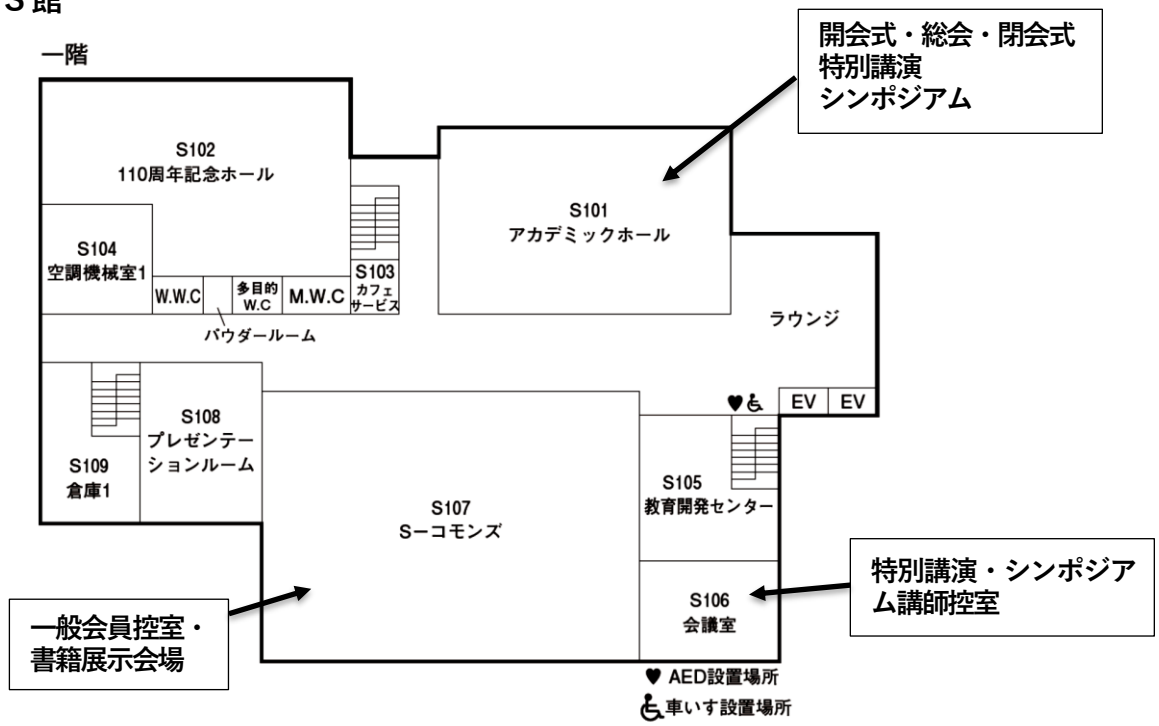


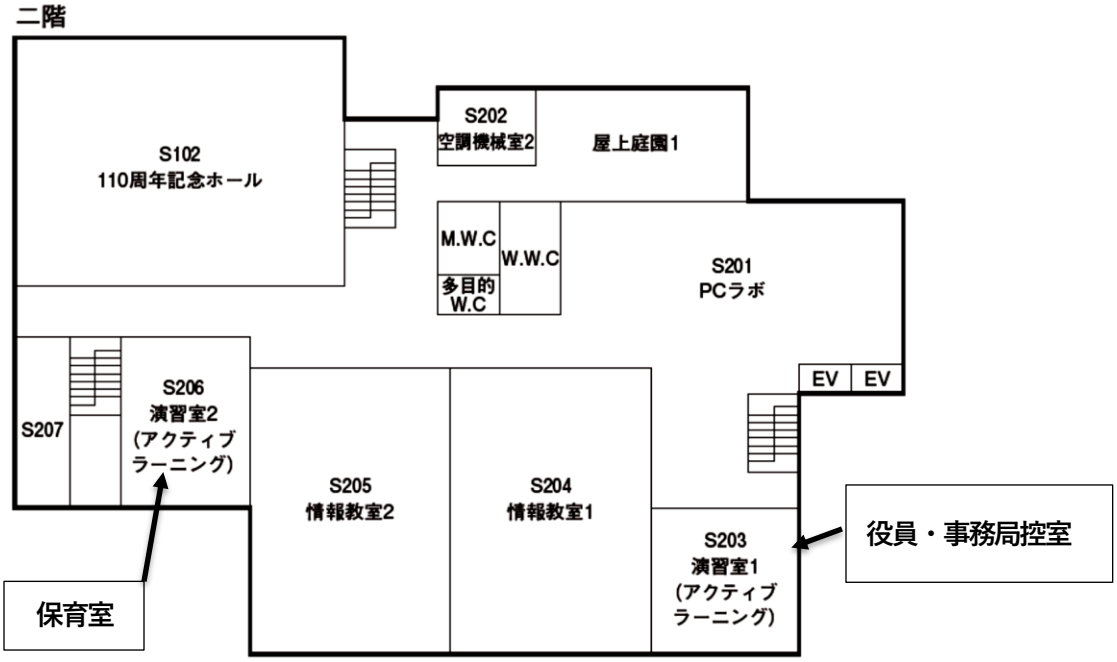
― 建物配置図 ―


キャンパスマップ
AED（自動体外除細動器）を設置しています。
・E館1F 正面入口
・U館1F 薬学分室横
・L館1F 北入口
・S館1F エントランス
・体育館1F エントランス
・就実こども園 ・就実小学校
・祇園グラウンド
ぜひ実際に場所をご確認ください！
AEDは、突然死を引き起こす不整脈（心室細動）に対して、医学的専門知識がなくても、救急救命できる装置です。意識を失って倒れている人の胸部に電極を貼付し、機械が必要と判断すれば、AEDの音声指示どおりに操作することで除細動（電気ショック）を与えて、正常な心拍を回復させることができます。救急車が到着するまでに、傷病者の近くに居合わせた人がAEDを使用して、心肺蘇生・除細動をできるだけ早く行うことが重要です。学内のAED設置場所を確認しておき、救命処置に役立ててください。
毎年、AEDの操作方法を含めた救命講習会を実施しています。また、一度も講習を受けていない方は、是非講習を受けてください。本年度の実施予定については、保健管理課にお問い合わせください。
※AEDを使用した救命処置の流れは、次ページをご覧ください。
B館
1階／大講義室、看護実習室など
2階／S コモンズ（デリ・カフェ）、セミナー室、スタディルーム
3階／教職ラウンジ、保育・教職支援課
教育実践研究センター、パウダールームなど
4階／院生研究室など
※東エリアは就実小学校
8館掲示板 3階 保育・教職課程 4階 教育学研究科
就実小学校
小学校グラウンド
P 南駐車場
T館
1階／T コモンズ、入試課
2～6階／講義室、調理実習室、被服構成学実習室、音楽教室、ダンス教室、美術教室、デザイン室など
T館 短大掲示板
自転車・バイク駐輪場
S館
1階／S コモンズ、パウダールーム、110周年記念ホール、アカデミックホール
2階／PCラボ
3階／情報システム課
2～4階／情報教室1～6
5階／講義室
6階／茶室、アゴラ
A館
1階／講義室
社務課、総合企画課、会計課（会計窓口）
1階～2階／ひかりてらす
3階／情報教室、情報ラウンジ
学習室1～4、ピアノ練習室1～10
4階／ミーティングルーム
B館
A館
E館
スクエアコモンズ
正面玄関
E館
1階／模擬保育室
管財課（受付窓口）
2階／心理教育相談室
3階／講義室
4階／講義室
D館
L館
R館
S館
Q館
P館
U館 薬学部・薬身薬学研究科掲示板（1階中央ロビー）
薬用植物園
R館 掲示板 1階ロビー 人文科学部、教育学部、経営学部 教務課、学生課（奨学金・ボランティア） キャリア支援・就職課、図書館、情報システム課 国際交流課 3階 人文科学研究科
F館
花時計
V館
U館
弓道場
証明書自動発行機
西門
D館
1階～3階／大講義室
G館
1階／ブックストア
2階／ロッカールーム
就実プロムナード
P 西青館北駐車場
JR西川原・就実駅
演習実習園
トマト銀行 CD/ATM 利用時間8:45～18:00（月～土）
L館
1階／教務課分室、保健管理課（保健室、学生相談室、聞かい・障害学生支援室を含む教室）
2階／学生ホール
3～4階／講義室
R館
1階／教務課、学生課、キャリア支援・就職課、国際交流課、総合受付
2～3階／講義室、院生研究室（人文科学研究科）
5階／大講義室
U館
1階／教務課薬学分室、ロッカールーム
2階／自習室、ロッカールーム
3階／臨床薬学教育研究センター、ロッカールーム
4階／OA情報室、図書室
N
図書館
B1階／書庫
1～3階／閲覧室
4階／特別閲覧室
特殊資料室
西崎文庫
グループ学習室
5階／AVホール
吉備地方文化研究所
博物館実習室
6階／会議室
体育館
1階／トレーニングルーム
多目的ホール、更衣室、シャワー室、講義室
2階／アリーナ
元ゴルフ練習場（駐車場）
V館（学生会館）
地下／カフェテリア
1階／学生ホール・ATM
カフェ（ベーカリー）、ショップ
2階／パウダールーム、ロッカールーム
2～3階／部室
3階／学友会室、同窓会室
屋上／屋上庭園
しゅうじつ薬局
（岡山市北区田益1291-1）
岡山医療センター 北
西北門
スロープ
駐輪場以外での自転車・バイク・車の乗り入れ、駐車は厳禁です。
祇園グラウンド（北へ約3km）
（野球場、サッカー場、テニス場、陸上競技場）
就実こども園（北へ約200m）
西川原サブグラウンド（北へ約300m）

— 建物配置図 —

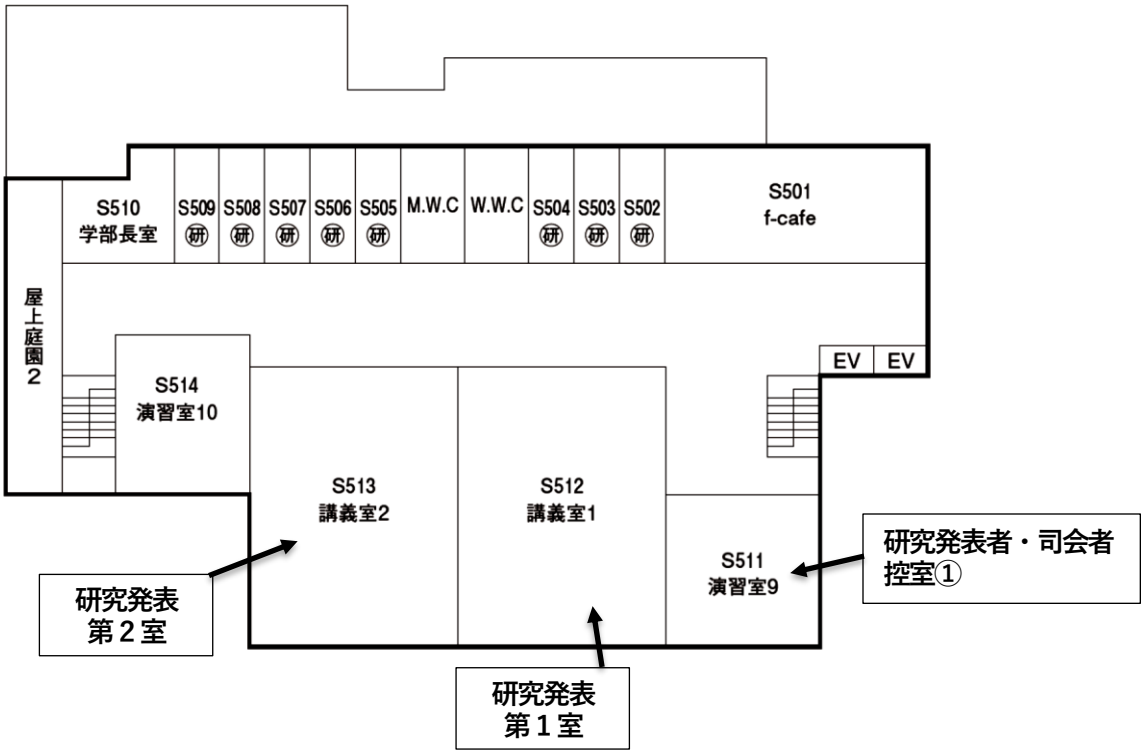
S 館


一階
開会式・総会・閉会式
特別講演
シンポジアム
S102
110周年記念ホール
S101
アカデミックホール
S104
空調機械室1
W.W.C
多目的
W.C
M.W.C
S103
カフェ
サービス
パウダールーム
ラウンジ
S108
プレゼンテー
ションルーム
S109
倉庫1
S107
Sーコモンズ
EV
EV
S105
教育開発センター
特別講演・シンポジア
ム講師控室
S106
会議室
一般会員控室・
書籍展示会場
AED設置場所
車いす設置場所

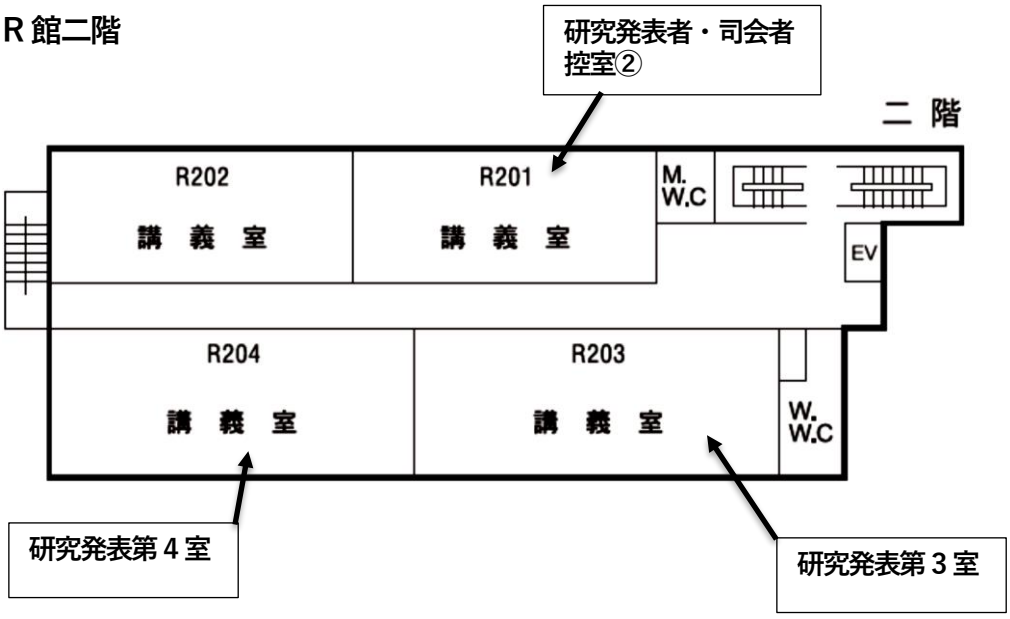

二階
S102
110周年記念ホール
S202
空調機械室2
屋上庭園1
M.W.C
W.W.C
多目的
W.C
S201
PCラボ
EV
EV
S207
S206
演習室2
(アクティブ
ラーニング)
S205
情報教室2
S204
情報教室1
S203
演習室1
(アクティブ
ラーニング)
役員・事務局控室
保育室

S 館

五階


S510
学部長室
S509
研
S508
研
S507
研
S506
研
S505
研
M.W.C
W.W.C
S504
研
S503
研
S502
研
S501
f-cafe
屋上庭園2
EV
EV
S514
演習室10
S513
講義室2
S512
講義室1
S511
演習室9
研究発表者・司会者
控室①
研究発表
第２室
研究発表
第１室

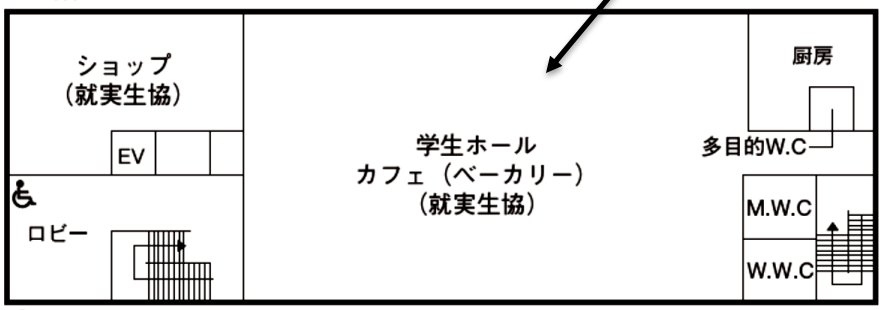
R 館二階


研究発表者・司会者
控室②
二 階
R202
講 義 室
R201
講 義 室
M.
W.C
EV
R204
講 義 室
R203
講 義 室
W.
W.C
研究発表第４室
研究発表第３室

V館

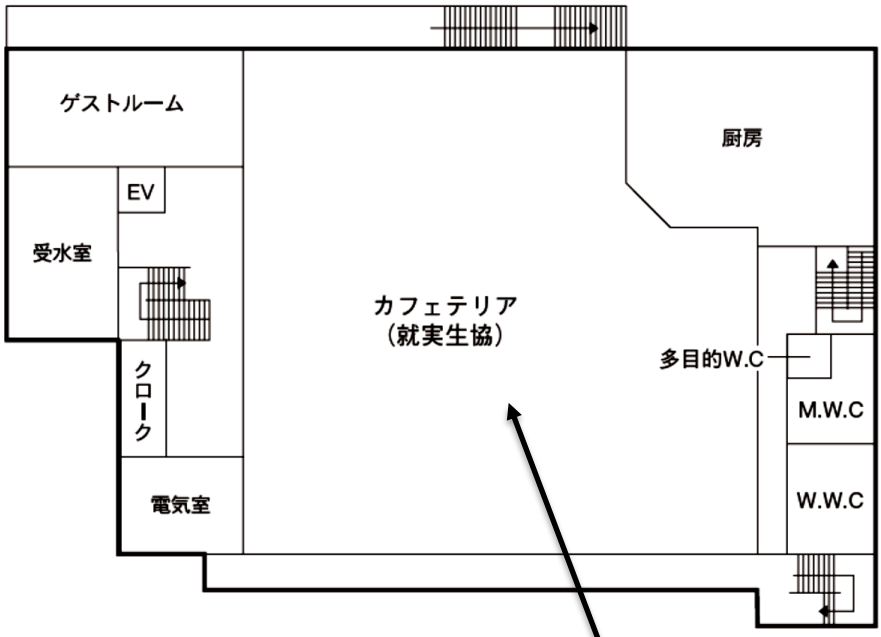
一般会員控室

一 階



車いす設置場所

地 下
一 階



懇親会会場

― 会場のご案内 ―

受　付	S館1階入口	1階ホール	研　究　発　表　会　場		
書籍展示場	S館1階 屋内広場	Sコモンズ	第1室	S館5階	S512 講義室1
開会式・総会 閉会式	S館1階 中講堂	S101 アカデミックホール	第2室	S館5階	S513 講義室2
特別講演	S館1階 中講堂	S101 アカデミックホール	第3室	R館2階	R203 講義室
シンポジアム	S館1階 中講堂	S101 アカデミックホール	第4室	R館2階	R204 講義室
特別講演・シンポジアム講師控室	S館1階	S106 会議室			
研究発表者・司会者控室①	S館5階	S511 演習室9	保育室	S館2階	S206 演習室2
研究発表者・司会者控室②	R館2階	R201 講義室			
会場校役員・関係者控室	S館1階	S108 プレゼンルーム			
役員・事務局控室	S館2階	S203 演習室1			
一般会員控室	V館1階大ホール／S館1階屋内広場	V館1階学生ホール／Sコモンズテーブル席			

― 懇親会のご案内 ―

開始時間：　午後6時00分
会　　費：　5,000円
会　　場：就実大学・大学生協カフェテリア（V館地下1階）
※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。